
バカとテストと恐怖のクローン召喚獣

ミスターK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと恐怖のクローン召喚獣

【Nコード】

N6130Y

【作者名】

ミスターK

【あらすじ】

こんにちわ、作者のミスターKです。
今回連載小説初投稿です。

原案はクレヨンしんちゃん 伝説を呼ぶ 踊れ！アミーゴ！ ジャ
ンルはホラーコメディですが前半はホラー要素が多いです。
原案ですのいろいろ改変したり、私自身小説を書いたのを初めて
なのでご了承ください。

よってお堅くならずできるだけ気楽に読んでいただけるとありがたい
です。

ではバカテスホラーワールドへあなたを招待致します。

第0話 「バカとテストと恐怖のクローン予告」

吉井明久と坂本雄二、木下秀吉、ムツツリー二、島田美波は夕方の暗くなつていく中近くの公園のベンチで座っていた。

その会話の内容はあまりにもシリアスといえよう。

オレ・・・見ちまったんだ。

姫路も翔子も工藤もFクラスの奴らもみんな偽者

見た目は本物そっくりだけれど、中身は全部偽者なんだ！

俺たちの中にも・・・いるかもしれない。

偽者が！

周りから子供たちの狂気に満ちた笑い声が響く・・・

それは、平和な文月学園の日常で突如おこったあまりにも恐ろしい事件。

変わっていく人たち、それは狂ったような、普通のような、ひと時にはわからない。

だけど確実に壊れていく日常は彼らの目の前にも侵食していった。

誰か気づいてくれ！そして止めてくれ！そうしないと大変なことに！校長室にあった手紙はすべての謎を解くための力ギとなるのか新たな恐怖の扉なのか・・・

「このまま学園は恐怖と偽者に支配されてしまうのか！」

「バカとテストと恐怖のクローン召喚獣」 こうご期待！

第1話 「クローン召喚獣」(前書き)

奇妙な足音とともに…自分そっくりの召喚獣が襲ってくる。

誰が仕組んだのか？何のために？目的は？

クローン召喚獣は自分のすぐ近くまで迫ってきた。

姫路、美波、秀吉、ムツツリーニ、雄二…本物は一体…

疑心暗鬼にとらわれた時、史上最恐の恐怖が文月学園に襲い掛かる。

…とはいうものの明久みたいなバカはそんなこと知ったこつちやない。
バカはバカなりにこの事件を解決してくれる…はずないか…
…

第1話 「クローン召喚獣」

科学とオカルトと偶然によって開発された「試験召喚システム」を試験的に採用し、学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こした文月学園。

振り分け試験の成績で厳しくクラス分けされるこの学園で自信満々にテストの結果を受け取った男子高校生・吉井明久を待っていたのは、最低クラスであるFクラスの、学び舎とは思えない最低の教室だった。

期末試験まじかに迫った時、授業内容が何もわからない明久は同じクラスの姫路瑞希と一緒に図書室で勉強していた。

7月2日 現在時刻：5時24分

文月学園2階校舎内のトイレに一人の男が悲しみのあまり啜り泣きをしていた。

実はこの男は2年Fクラスの男なのだが実はこの男、同じ学年のAクラスの女生徒に告白して撃沈したのだ。

自分でも最大の賛辞を送って相手に告白したのだが相手の返事は、

「無理。ごめんなさい、私頭の悪い男子・・・いや最低でも自分より頭がよくないと。だからじゃあね」

とってそのまま呆然としている男子を置いてどこかに行ってしまった。

男はそのまま数分間啞然としその後正気を取り戻しトイレに駆けこもって今現在に至る。

「畜生、畜生、畜生・・・なんでこうなるんだよ・・・吉井はモテ

るのに。許さない」

これからは異端者を処罰するFFF団としての活動に命をささげると心の誓ったその時。

トイレの個室が開きそこから綺麗でしなやかな腕が手招きするように男を呼んでいた。

ここは男子トイレなのだがその腕はまるで女のようだった。

(なんだあれ？もしかしてさっきの・・・！)

男子生徒は嘘だと思いながらも涙をぬぐいながらそのトイレに個室に向かい歩いて入っていった。

ギョッ…ガチャン!!!

扉が閉まり数秒もしないうちにまた扉が開く。

そこから出てきたのは先ほどまで泣いていた男とは別人のような男が不敵な微笑みを浮かべながら出てきた。

丁度同時刻、二人の生徒が図書室で勉強している。

姫路「ここは？」2を代入して方程式に代入するんですよ」

明久「へえ、そうなのか(さすが姫路さん、わかりやすいな)」

学園でも一、二を争うほどの姫路さんに教えてもらえばどんなバカでもある程度はわかるはず。

文月学園内の図書館は試験期間内のみ図書室は5時30分まで開い

ているのだがもう人は明久と瑞希しかいなかった。

放課後二人で勉強するなんて聞かれたら異端審問会やほかのクラスメイトになにされるかわからないので二人で打ち合わせをした。

そしていったん学校を出たのち二人で図書室でおちあったというわけ。

明久としても3時30分に勉強を始めたのでここまでまじめに勉強したのは何か月ぶりだろう。

いつもまんがやゲームに没頭してしまうので・・・ダメな少年であった。

それに引き換え瑞希はこんな時間の勉強朝飯前、明久相手に丁寧教えるほどの余裕があるのだから驚き。

「そういえば、この頃クラスのみんなやけに元気あるよね」

「えっ！そ、そうですか？」

実はその頃瑞希は明久と二人つきりで勉強してるとそのことばかり考えていたので変な奇声をあげてしまった。

「????」

「私はそうはみえませんが・・・でもそうだとすると期末試験後の試験召喚戦争があるからでしょうか？」

「やっぱり！今度こそはAクラスに勝たないとね」

「じゃあそのためにもいっぱい勉強しないとですね」

「やっぱり・・・勉強しないと点数は取れないか。でも雄二が霧島

さんとこの頃なにか怪しげなこと話してたのを見たな」

「フフフ、やっぱり霧島さんと坂本君は仲がいいんですね」

「そうかな（雄二があれは敵を安心させて楽に試験召喚戦争を行う
畏だっって言ってたけど）」

それは言わないでおこうと明久は思った。

「そうだ明久君。試験が終わったらどこか遊びに行きませんか？」

（えっ？それってもしかしてデート？）

その時、後ろの扉から一人の少女が入ってきた。

制服の上からもわかる豊満な胸に、育ちのよさそうな背格好、さらにピンクの髪。

誰かに似ているような気がしてならない人、それは……

だけれど明久たちが座っている机からかなり離れていたので二人が
気付かない。

「じゃあ試験が終わった日にプールにいきましょう。その温水プー
ルのチケットが手に入ったので」

プール、プール、プール！！！！！！

明久の頭の中に瑞希の水着姿が思い浮かんで爆発してしまう。

「でもなんで試験なんか、勉強なんかあるんだらう」

「やっぱりそれは将来、社会に出て役に立つためなのではないです
か？」

「僕がこの学園の学園長だつたらまず試験は廃止するよ。そして豊かな行政改革を実施するんだ」

「それってどんなのですか？」

「たとえば食券は全部無料で、図書室には漫画、教室にはゲーム機が勢ぞろい・・・いいなあ」

すると立ち上がって何やらうかれたように踊りだす明久。

それは行政改革ではなく自分の趣味の押しつけである。

それを見たひとりの生徒が明久に一つの飴を差し出す。

「はい、陽気なのは結構だけれどもっとがんばってね。もうすぐなんだから」

「もうすぐ？（テストのことかな？）」

すると生徒はそそくさと図書室を後にした。

『5時30分になりました。校内に残っている生徒は速やかに下校してください、繰り返しです、5時30分になりました・・・』

ちようどいいところだったのに下校のアナウンスが入ってしまった。仕方なく荷物を整理して図書室を出て学校の校門前に向かう、明久と瑞希。

「じゃあ僕は買い物があつて右に行くから、姫路さんは左だっけ？」

「そうです。ではまた明日」

「じゃあね」

たわいもない挨拶をすると二人は別々の方向に歩いていく。

【 姫路瑞希 目線 】

あたりもすつかり暗くなり周りにも人は誰もいない。

期末試験が終わった後、明久と一緒にプールで遊びに行くことを思い浮かぶと自然と笑みが出てしまう。

(楽しみだなあ)

靴の音をなびかせ歩いていると唐突に後ろから、靴の音が二重になって聞こえてくる。

(あれ？もしかして明久君？)

ちよつとの期待をのぞかして後ろを見てみたがそこには誰もいなかった。

ではさっきの足音は誰だったのだろうか。

後ろの踏切警報機が鳴り響く。

周りがほとんどいないのでその音は瑞希の耳によく聞いている。

(いそがなきや)

遮断機が下りる前に急いで走って踏切を渡るがそのさい大きな胸が邪魔になるような気もした。

遮断機が下りると後ろを電車が通る。

やっぱりさっきのは気のせいだったのだろうかとまた元の道を帰ろうと振り返ったその時！

みつけた・・・・・・・・姫路さん・・・・・・・・

そこにいたのは自分とそっくりの人間、もう一人の姫路瑞希だった。

その瞬間、もう一人の自分に強引に腕をつかまれどこかに引きずられようとする。

「た、助けて・・・・・・・・」

しかし電車の通る音でその声はかき消されてしまっ上に電車の窓が真っ赤に染まっているように見えた。

瑞希の絶叫が街に響き渡った・・・・・・・・

第1話 「クローン召喚獣」(後書き)

第一章を書き終わりました。

これから頑張っていこうと思います。

今回は瑞希がそっくりさんにつかまってしまつところまで書きました。

これから日常をどんどん浸食されていく明久たちを書いていきます。

不束な小説ですがどうぞ支援よろしくお願いいたします。

第2話 「非日常」(前書き)

無事に第1話が書き終わり第2話に突入です。

瑞希が事件に巻き込まれた翌日から物語が始まります。

・
実はこのそっくりさんの異変にいち早く気付くものが・・・一人・・・

今回は全編会話パートにするつもりです。

第2話 「非日常」

7月3日 現在時刻：7時21分

明久はこの日、いつもの通り（？）姉の吉井玲によるキスのおはようが行われようとした。

しかし直前で気づきベットから飛び降り難を逃れることができた。

玲はすごく残念そうな顔をしていたが、明久は安心していた。

もしこれ以上、キスが続けていたらもう逃れられない。

ひどければ童貞を奪われ、それでも折檻は免れない。

本当によかった・・・

「アキ君。お姉さんのことを愛していませんか？」

「いやそっじゃなくてさ」

「それはそうと、今度女の子と遊びに行くんですね。プールに・・・

」
「なぜそのことを！！」

この瞬間、吉井明久は窮地に立たされることになる。

「なんのことかな、知らないな」

無駄だと思いが一応しらを切ってみる。

（まずい…姉さんは僕が女の子と仲良くすることを禁止している。

もしも、もしも、もしも姫路さんとプールに行くなんてわかったら

なにをされるか！)

「行くんですね？」

「ひ、ひ、ひ、明久のヒ・ミ・ツ」

可愛くいつてみたが目の前の玲はなにやらブラックなオーラを醸し出していた。

「歯を食いしばってくださいね」

「ごめんなさい！」

一応土下座して謝ってみた。許してもらえとは思えないけれど。

「人間いつどのときでも過ちは犯すものです・・・ですから姉さんが熱いキスをしてあげましょう」

そついうと玲は明久を肩からつかみ唇を迫ってくる。

「その流れおかしい。まって、謝るから！ストップ、ストップ、ストップ！」

死ぬ思いでキスを逃れることができた。しかし

「アキ君はそこまで姉さんのことが嫌いなんですね」

「ごめん・・・でもやっぱり兄弟でそんなことするなんて・・・」

「ムラムラしますよね？」

「変態だ〜！ここに変態がいる〜」

「本気にしないでください。3割は冗談ですので」
「やばい危険だ。と言う事は7割、つまり半分以上本気で接している」

（これは果たして本当なのだろうか・・・もしかして偽物の世の中なのかも。みんながグルで僕を陥れようと）

「そんなことあり得ませんよ。姉さんはいつでも本物です」

心を読まれたことに明久の頭の中はオーバーヒート寸前であった。

「それにアキ君が本物だったら誤魔化そうとしたのですか？一緒に遊びに行くのが女の子でなければアキ君は正真正銘の本物ですよ」

「じゃあ偽物だという証拠は？」

「アキ君を無理やり女装させた時嫌がればまたは私とキスをしなければ・・・偽物ですよ」

なんでそんなことで偽物か本物かを見分けられなければならないのか・・・そもそも僕は正真正銘の本物だ！

「しかたないですね。ただし不純異性行為と認められてしまったときは」

「ときは？」

「一族全員皆殺しです」

「それは姉さんも死んでいるから」

・・・と言う事があったとやつれきつた明久は雄二に説明している。雄二には珍しく最初から最後まで話を真剣に聞いてくれた。

それはおそらく雄二もよく霧島さんに同じようなことをされているからであろう。

どんなことをされているかは皆様のご想像にお任せしますが・・・

「明久。お前も大変なんだな・・・」

「雄二・・・」

見つめあう二人。

「お主ら、何をやっておるんじゃ？」

後ろを振り向くとそこには木下秀吉とムツツリーニこと土屋康太そして島田美波がそこにいた。

「あんたちやつぱりそついう趣味があるのね」

「・・・ボーズラブには興味ない」

淡々というムツツリーニになんでか涙目で哀しそつに言う美波。

「「違う!!!」」

二人は今日一番（まだ朝だが）一番の声で言った。

「冗談よ」

「・・・冗談」

「わしは冗談に見えなかったが」

「早く行こうぜ」

強引に話を終わらせて学校への道のりを先にする明久御一行様。

それからなんとなくたわいもない話で楽しむ。やっぱり平和が一番と明久は思った。

とその時、雄二が何かを思い出したようにため息をつく。

「おい雄二。ため息なんて雄二らしくないな」

「そつね、いつもの坂本じゃないわね」

「そつじゃな、何か悩みでもあるのか？」

「・・・恋の悩み」

「「「ないない」」」

三人で一斉にムツツリー二に突っ込みをする。

「そついえば昨日も元気がなかったような」

「どつせ霧島さんのことでしょ」

「なるほどじゃない」

そういってなぜかみんな思い当たる節がいくつもある。

霧島さんの雄二好きはたまに常軌を逸したものがあるから。

ある時は手錠で、ある時は睡眠薬で、ある時は監禁されて・・・こまでくれば立派な犯罪である。

でもそれぐらいならばほぼ毎日のことだから今更ため息をつくほどのことじゃないのに。

「そうじゃないんだ！」

「じゃあなんなんだよ」

「翔子がこの頃なんか変なんだよ」

だからあまり言っただけは失礼だが霧島さんが雄二に対して変なのは今に始まったことじゃない気がする。

「翔子が最近俺に優しんだ」

は？

どういこと？

「それが翔子のやつ俺が女子のことと見たりしても浮気とか言わなくなっただけ、なにより俺の思ったこと何でもやってくれるんだ」

(いいじゃないか！結構じゃないか！理解してくれるなら)

「それが何か問題でもあるのか、坂本」

「いや・・・それは、その・・・根本的な問題だ！」

なんじゃそりゃと全員が一致して思った。

「でも信じられないな、そんな霧島さんがねえ」

「じゃあ見せてやるよ証拠を」

すると雄二は大声で「おゝい、翔子〜」と叫んだ。するとどこから聞いていたのか霧島さんが勢いよく飛んできた。

「・・・雄二。おはよう、どうしたの？」

可愛い目でいつもとは思えない霧島さんが雄二の手を握った。

ブツシュー！

ムツツリーニは鼻血が出たのかティッシュを鼻に詰めていた。

「ちょっと呼んでみただけだから、もう言っていない。またあとでな」

「・・・はい。じゃあまたあとで」

「会長。早く行こうよ〜」

走って行った先には工藤さんが笑顔で勢いよく手を振っていた。おそらくあそこにいたのだろうか。

一同は何のことかわからず啞然としてしまふ。

「なんなんだろういったい」

「ほらな変だろう」

「た、確かに・・・」

「俺わかるんだ。長年一緒にいたからわかるんだ、あの翔子は、あの翔子は・・・」

本物じゃない！

朝なのに明久、雄二、秀吉、美波、ムツツリーニ五人の周りには冷たい風が吹き荒れる。

この一言がこれから訪れる恐怖のカギとなるとはだれも思わなかった。

第2話 「非日常」(後書き)

第2話「非日常」

みんなの日常とともに一人の少年の非日常の幕開けを書いてみました。

次はもう一人から語られる恐ろしい都市伝説を。

まだまだ話は序曲。楽しんでいってください

第3話 「序幕の幕開け ～文月学園都市伝説～」 (前書き)

今回はムツツリーニが語る怖い都市伝説を。

実はこの都市伝説が物語のキーとなるかもしれません。

第3話 「序幕の幕開け ～文月学園都市伝説～」

本物じゃない！

雄二のあまりにも衝撃的でなおかつ普通の人には到底理解できない発言に一同は言葉を失う。

そもそも本物じゃないというのはいったいどういう事なのか？

じゃああれはいつたい誰？

霧島翔子・・・はつきり言ってそれは彼女をしている人であれば誰でもわかる。

それを性格が少し変になっただぐらいで「本物じゃない」といわれればどう対処していいかわからない。

明久は怒りを通り越して呆れに入っていた。

バカなのに・・・

「関係ないよね！バカなのは！」

「明久、おまえは誰に向かって怒ってるんだ？」

「いやその・・・っていうか本物じゃないってどういうこと？」

「本物じゃないってことは、本物じゃないってことはつまり偽者ってことか？」

偽者だとは先ほど以上に大胆かつ奇抜な発言であった。

「分かんないが、本物そっくりでも本物じゃないんだ。それで翔子が偽者だっただけに誰も気づかないんだ」

「ということは気付いたのは坂本、お主だけだと言う事か？」

鋭い指摘をよこから繰り出すのは文月学園随一の男の娘である木下秀吉。

あくの強いバカばかりのFクラスで数少ない常識人といえるべき人物だ。

しかし彼はれっきとした男なのでやはりそういう点ではFクラスなのだろうかと思う。

「ま、そういうことになるかな」

顔を赤めて恥ずかしそうになおかつ自分に対しての優越感を感じる顔をする雄二。

「・・・そういう噂を知ってる」

ムツツリーニがヌツと雄二と明久の目の前に現れ、二人は驚きのあまり声も出なかった。

「びつくりした〜」

「土屋、それってどういう噂なの?」

怖いモノ嫌いの美波が何やら積極的にムツツリーニに噂のことを聞いてくる。

この前の肝試しの時は大変だったなと3秒間の思い出に浸る明久であった。

「文月学園の話なんだけれど・・・」

遊んでるか、勉強してるかで暗くなり家に帰ろうと校門を出て一通

りのないところを歩いてみると、

ヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタ

ムツツリーニが怖い雰囲気を出すためなのかゆっくりと4人の周りを歩く。

周りには紫のブラックなオーラが流れ出す。

「・・・振り返っても誰もいないけれどまた歩き出すと、

ヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタヒタ、ギヤア!!!」

大声で手を挙げて叫ぶムツツリーニ。

「って突然目の前に自分のそっくりの偽者が現れる」

「うそやだ、怖い」

「そ、それでどうなるのじゃ？」

「そっただぞ」

ただいまと家に帰るのは本物ではなく偽者のほうらしい。

そして本物は二度と家には戻ってこない。

「バカバカしいな、さっきはあんなこと言ったけれどいるわけないじゃないか、そんな自分そっくりの偽者なんて」

雄二がなぜか汗水たらしながらムツツリーニに言った。

確かにムツツリーニの話かたは明久でも少し引いてしまうほど怖か

った。

朝なのに五人の周りには夜のような雰囲気になってしまった。

「そりゃ、まあね」

「だいたいムツツリー二は誰から聞いたんじゃ？その噂は？」

秀吉がムツツリー二に噂の出所を聞く。

「……よくわからない、ムツツリー二商会の噂情報網から。人呼んで……」

『文月学園都市伝説』」

「でも土屋、それって根も葉もない噂ってやつじゃない？」

「あつ！美波が恐がってる。ぺったんこな胸の割……ギヤアアアアアッ」

余計なことを言った明久は美波に凄まじい関節技を受けてそのまま動かなくなった。

「まあ翔子は気紛れだからな、すぐに元に戻るとは思うが」

「ねえねえ、偽者って本物を食べるのかな」

「……わからない、でもとにかくいなくなる」

「でも、でも、もしも姫路さんや霧島さんや工藤さんやほかのみんな……僕以外の人がみんな偽者だったらどうしよう」

暗いムードになっているその時後ろから光となる存在が現れた。

「おはようございます、明久君」

それはFクラスの清涼剤ともいえる人物、姫路瑞希さんその人であった。

どんなに悲惨な状況下でも彼女が現れば空気が清掃されてしまう、裏を返せば彼女がいなければ悲惨な状況がさらに悲惨な状況になってしまう。

「大袈裟じゃないの？」

「だから明久は誰に話しているんだ？」

「えっ？」

「みなさんどうしたんですか？なんか空気が重そうでしたけれど」

やはり姫路さんはこの状況下を察知してくれたのだろうか？

頭のいい人は空気までも上手に読むことができる。明久は思った。

「いやそれがね雄二が・・・」

「明久先ほどの流れを説明中」

「そうなんですか、みなさんはどう思いますか？」

「えっ？僕は・・・秀吉はどう思うっ？」

「わしは・・・坂本はどう思うっ？」

「俺は・・・島田はどう思うっ？」

「私は・・・瑞希はどう思うっ？」

「私はですね・・・」

「・・・ループしてるし！！！！」

明久、坂本、秀吉、美波はいつせいに突っ込みをする。

「偽者でもみなさんでしたら優しい偽者だと思いますよ」

あまりのまぶしさに四人は目をくらます。

太陽の光なのかそれとも瑞希さんの光なのかわからないがそのまぶしさは100カラットはあった。

「明久君、急ぎましょ」

すると瑞希は明久の手を握ってそのまま歩き出す。

「ちょ、ちょっと姫路さん」

「瑞希いいい！」

明久と美波は目を丸くして驚く。

「早くしないと遅れてしまいますよ、さあ明久君それに皆さんも」

「ちょっとまって！」

美波も明久の手を握って明久たちは学校へと去って行った。

残った三人は呆然としてしまう。

「どうするこれ？」

「・・・残りは当局に任せる」

「当局とはなんじゃ？」

「分からないか秀吉。この状況下を見たFFF団が」

「そうじゃ」

「・・・そうあいつは絶対に処刑されてしまう」

「だから俺たちはあえて止めなかつたんだ」

「・・・異端審問会は人の幸せ、特に女に絡んだ男に幸せは許さない」

「お主らというやつは」

呆れる秀吉を連れて三人は明久の後を一定の間隔を置きながらついてゆく。

だが学校についた三人は驚愕のものを目にするようになる。

美波と瑞希が両端についた明久が教室に入る。

その瞬間想像を絶する惨劇がFクラスに繰り広げられる

・・・はずだった。

「よお吉井、おはよう」

「姫路さんに島田さんもおはよう、一時間目は体育だった」

「おれたちも着替えたから急がないと鉄人に怒られるぜ」

「手なんか繋いじやって。早く着替えるよ」

入る寸前惨劇が頭に浮かんだ明久とはなつから惨劇を思い浮かべていた三人は何がなんだからわからなかった。

「これはいったいどういうことだ？」

「・・・俺にもさっぱりわからない」

「わしもこの状況は理解することができぬ」

Fクラスの奴らは全員一斉に教室を出て行った。

「じゃ、じゃああたしたちも更衣室に行くね」

「ではあとで明久君」

「ではわしもいくとするかの」

女性人二人は女子更衣室に秀吉は秀吉専用更衣室に行く。

三人もいつまでも呆然としているわけにもいかず着替え始めた。

ムツツリーニは迅速の速さで着替えて先に行ってしまった。

「異端審問会の奴ら一体どうしたんだらうな？」

「僕にもわかんない、はっきり言って殺されるかと思った」

着替え終えた二人が体育館に行こうとすると教室内の空いた窓の近くに姫路さんがいた。

「明久君一緒に行きましょう」

「う、うん」

(やっぱりあんなアグレッシブな姫路を見たのは初めてだ……一体どういう……はっ！)

雄二の脳内に先ほどのムツツリーニが語った文月学園都市伝説が頭に浮かぶ。

本物は消えてしまっ

「そんなはずない、まったく別人とかそっくりさんとかって付き合
ってられないって」

「なんか姫路さんずいぶん積極的だね。まるで昨日と別人って感じ」

（別人？）

明久の言った『別人』という言葉に反応する。

「昨日と変わりませんよ」

瑞希は笑顔で否定した。

（ふん、バカバカしいな偽者だなんて）

「先行ってるぞ」

雄二は明久を置いて体育館へと走って行った。

空いた窓から雄二が向こうに向かっていったのを確認した瑞希は突
然窓を閉める。

その窓は一瞬だけ赤く染まったように見えた。

「それで明久君にちょっとお話ししたいことが・・・あるんですけ
れど。できたら放課後、教室で」

不敵な微笑みを見せた瑞希に明久は「はい」と答えることしかでき
なかつた。

第4話 「置き手紙の謎」

明久と姫路は二人きりで行くこととしたら美波が後ろからものすごい勢いでとび蹴りしてきた。

その顔はとてもじゃないけれど直視できないぐらい鬼の形相していた。

だけれどはたから見れば笑顔の鬼の形相なので一層恐怖が増す。当の明久はなぜ自分が蹴られたの分からず走馬灯が頭によぎる。

「楽しかったな・・・僕の十数年間、さらばだお母さん・・・僕を生んでくれてありがとう」

ムツツリーニの写真をもつと買ったかったし秀吉の女装も見たかったし姫路さんと一緒にプールそして雄二・・・あいつのことはいいや さようなら」

と天に召される寸前にまた関節技を食らわせられ現実に戻る。

「アキ・・・あんたいったい何してるの!？」

「いや僕は何にも」

「瑞希は包丁を5本ほど持ってきてくれる、その包丁で楽しいことするから」

「包丁ですか?わかりました」

「お願いひマフ、たじげてください!」

「まったく、仕方がないわね。アキの許しに免じて包丁二本で許してア・ゲ・ル」

「いやいや『ア・ゲル』じゃなくて包丁って一本でも刺さったら致命傷って知ってるよね？」
「というか姫路さんも止めてよ！」

しかし瑞希はなぜかニコニコと見ているだけで止めようとはしなかった。

その時突如授業開始1分前の予鈴チャイムが鳴った。

そうなるのと美波も関節技を中断して瑞希とともに体育館へと猛スピードで走って行った。

取り残された明久は動くことができずそのまま一分がたち授業が始まってしまった。

一時間目の体育は補習授業担当の鉄人が受け持っているので遅れるわけにはいかないのだ。

よって明久はボロボロの体を動かして体育館に向かったがもうすでに手遅れであった。

〈文月学園 体育館〉

「吉井！俺の授業に遅れるとはいい度胸だな」

「いや僕の話聞いてください。今回遅れたのにはちゃんとした理由があるんです」

「なんだ聞いてやるから言ってみろ」

「倒れてました」

確かに本当に明久は倒れていたがそんなことが通用するはずもなく。

「そんなこと信用できるか！」

「え〜」

「まあいい。はやく列に並べ」

あれ？今回は意外と怒られなかった・・・僕の誠意が認められたのかな。

おそらくそんなはずないがさほど怒られなかったことに喜びを感じながら列に並ぶ。

「今日は体育だが予定を変更して試験召喚獣での体育とする。まずは須川と佐藤から」

「はい！」

鉄人に一番に呼ばれただけなのにあの二人は大声で「はい」といった。

先ほどもそうだったがなにか嬉しいことでもあったのだろうか？

残った連中は各々座ったりして談笑して鉄人に呼ばれるのを待っていた。

「朝からついていないよな」

「まったくだな、特に明久は」

「そういえば昨日も変える寸前に持ち物検査というふざけた検査があったよな」

それは先日皆が帰る寸前のHR（ホームルームの略）のことだった。

「全員そこを動くな！鞆を机の上において中身が見えるようにして出せ！」

まずかった、その日明久は特に授業に関係のないもの いや 授業に関係のないものしか持ってきてはいなかった。

次々と持ち物を没収される哀れな生徒たち。

抵抗するものは容赦ない制裁され、泣きわめく者までいた。

「授業に関係のないものは一か月間俺の自宅で没収だ」

白い袋にどんどん詰めていく鉄人の姿はまるで逆サンタクロースのようだった。

そしてついに魔の手は明久のところまで来る。

「吉井、貴様は制服も靴下もすべて脱げ」

「な、何ですか？雄二でさえポケットだけでよかったのに（それでウオークマンをとられたけれど）」

「ダメだお前はズボンの中にすら何かを隠し持っているからな。現にはら一年前の持ち物検査の時はそれでDSが出てきたぞ」

「よく覚えていらっしゃるお方」

「お前のバカっぷりは忘れたくとも忘れないんだよ。わかったら早く服を脱げ」

「いや〜犯されるついで」

結局明久はゲームソフト、漫画、音楽プレイヤー、その他もろもろ限りなく出てきた。

因みに一年前より没収される量が増える。

「僕の、僕の、僕の愛すべき子供たちが」

〜回想終了〜

「よりによって先月買ったウォークマンの最新型が没収されるとは雄二は悔しくて歯をギリギリ鳴らす。

「僕はおそらく今回の没収だけで総額4万は超えてるよ」

「次、姫路と木下は前に出なさい」

鉄人に呼ばれて秀吉と瑞希が前に出がなせかこの時だけ男子からは歓声が上がった。

「お、姫路さんだ。ムツツリーニはせっかくの体操着姿を写真に収めなくてもいいの？」

「・・・デジカメはすでに没収済み」

体育なんてそう何回もあるわけではないし木下&瑞希のダブルショットはめったにお目にかかれない。

それを逃したムツツリーニは本当に悔しそうであった。

「そういえば昨日の持ち物検査って校長が提案したものなんだってね」

「なに？ そうなのか・・・」

「そうらしい」

「そうか、それならやることは一つ」

「そうだね」

「復讐だ」

なぜかダンディーな雰囲気流した二人はこんなくだらない検査を提案した校長への復讐を誓った。

「次、吉井と島田は前に出なさい」

「それじゃあ行ってくる」

「おう、お前は今じゃ観察処分者だもんな。召喚獣の扱いは慣れるだろ」

「あのね一応言っておくけれど僕は雄二と違って『問題児』ではないからね」

（観察処分者だって・・・失礼な。しかし文月学園開校以来一度も出ていないバカの代名詞が僕にあたってしまっただなんて）

「吉井!!!早くしろ!!」

「はっ、はい」

怒鳴られて目の前の空いているところに立つと美波が哀しそうな顔で立っていた。

（どうしたんだろう、優しい言葉でもかけてあげようかな）

「どうしたの？自分の召喚獣があまりにも貧弱でショックした？」

だが明久の顔を見た瞬間に美波の顔は一気に笑顔をとり戻した。

「あつそうかアキが相手だったんだ嬉しい」

「やれやれみんなの前で困ったものだ。明久は自分に酔いしれる。」

「アキを殴るのってすごく気持ちいいもんね」

「本当に困ったものだ。」

「美波つたら、なぐり合うのは召喚獣だよ？僕らじゃないって」

「わかってるけどアキは間違ってる」

「なにが？」

「殴り合うんじゃないって、私が一方的にアキを殴るだけだから」

（全然分かっていない！）

「あの鉄・・・いや西村先生。これは校内暴力宣言ですよ。僕らの持ち物検査よりこういう苛めをなんとかしないと」

「そうだな、島田」

「はい」

「今回だけ特別だぞ」

「はいっ！頑張りますっ！」

「その会話おかしくない？」

「しかし先生も美波もバカだな。僕がそう簡単にやられて許しを請うとでも？逆に返り討ち・・・」

台詞をまだ言い終わっていないが美波に顔をつかまれてそのまま引きずられる明久。

その時間、一人の男の想像を絶する悲鳴と誰かを一方的に殴り殺すような音が体育館に響き渡った。

明久は苦しみあまり許しを請うが許してもらうことはなかった。

昼休みに明久と雄二は教師の目を潜り抜けながら校長室へと侵入した。

二人はその前にどこからか仕入れた鍵150個を持っている。

学園長室のすべての机の引き出しに鍵をつけて『どれかが当たり、頑張つてね？』という張り紙とともに偽の鍵150個とそれぞれ違う鍵穴と混ぜて机の上に置いた。

雄二が見張りをして明久が実行係。

「終わったよ」

「よし、じゃあ撤収するぞ」

明久がそそくさと校長室を後にしようとする一枚の紙が落ちた。

それは紙というより手紙みたいだ。

表面には『これを見たものへ』と書かれていた。

「なんだろうこれ？差出人は不明だよねえ。ってこれを見たものへって僕のこと？」

確かに人の名前を書いていない以上、これを最初に見た明久宛の手紙といっても過言ではないと思われる。

手紙をまじまじと見ていると急に雄二が校長室に入ってきた。

「鉄人が来た！逃げるぞ！」

「わ、わかった」

明久はとっさに手紙をポケットの中に入れて校長室から教室へと猛スピードで走って行った。

教室では瑞希と美波とムッツリーニと秀吉が楽しそうに談笑している。

「どうしたの？」

「あつ、明久。どこ行っていたのじゃ？」

秀吉が質問するがさすがに校長室に行つて復讐してただなんて口が裂けても言えない。

「ちょっと勉強に」

「嘘じゃな？」

「なんでわかったの？」

当たり前である。明久が昼休みに勉強するだなんてありえないしもしいたとすればそれは・・・
その時瑞希が何か思いついたような顔をした。

「そうだ、みなさん今日家に来ませんか？」
「えっ？」

「今日はお父さんもお母さんもないし、おいしいお菓子があるんです。それに試験勉強を兼ねて」

お菓子という言葉に明久は反応する。

普段お腹を空かせている明久（この頃は玲によって少しは空腹時間が減っている）にとって食べ物が斑得るチャンスを逃す手はない。

しかしそれでも瑞希の誘いを断る理由はない。

「僕はいくけれど、みんなは？」

「わしはいくぞい」

「あたしも行くわよ」

「・・・行く」

「俺もいってもいいぜ」

「じゃあ皆さんでいらしてください」

と言うことで明久を含めたら5人で瑞希の家に行くことにした。

（いらしてくださいね・・・楽しみです 本当に楽しみ ）

第5話 「カラスがなく頃に」

7月3日 現在時刻：15時32分

帰りのHRのち鉄人に呼び出された明久&雄二。

二人は何のことかわからないような顔をしていたが校長室の件だと言ふ事はすぐに頭によぎった。

鍵を150個も付けるようなイタズラはあの二人しか、しないからと本人たちもわかっている。

ただ呼び出し理由は予想とはずいぶん違った。

坂本はクラス代表としての仕事、明久は観察処分者としての仕事。

鍵の件はまったく問われることはなかった。

嬉しいような不思議なような、明久は姫路たちに先に行くように伝えて鉄人のところに行った。

仕事が終わって教室の戻る明久。

赤と黒のコントラストが窓覆っている。

「やっと終わったよ」。鍵のこと言われなかったのは良かったけれど鉄人のやつコキ使いすぎ」

先ほどは鉄人にあれやれこれやれと言われ続けられたので瑞希の家に行く前にかくたたくたの明久であった。

この後勉強しに行くだなんてこれはある意味拷問だ。

(そういえば姫路さんが放課後に教室でって言ってたけれど何だろっ?)

今日になっていつもと違う雰囲気を出している瑞希の言いたいことをいろいろ想像する。

といつてもバカの明久に相手の考えていることを考えるのは容易ではない。

一人になった教室で明久が帰る支度をしているとポケットの中に何かが入っていた。

(なんだろうこれ？お菓子かな)

ポケットから出したものを見てみるとそれは昼休みに校長室から持ち出した『これを見たものへ』という手紙であった。

中を見ようとすると雄二が入ってきてまたとっさにポケットに拾う。

「よお明久、何やってるんだ？」

「いや、雄二こそそんなところで何やってるの？」

「おれは普通にクラス代表としての集まりがあつたんだ。まあ俺は参加しないでほとんどは翔子が仕切っていたけれどな」

「ふん。あつ、そういえば霧島さんの様子はどうなの？まだ雄二の言うおかしいつてやつ」

「いやあの時は普通のいつも通りの翔子だったけれど、やっぱり時たま俺に対して笑顔で手を振ってくるところが・・・」

明久が雄二の腹をグーでパンチする。

「いつてええ！何するんだよ明久」

「雄二の痛さより、僕の心の痛さのほうがはるかに大きい」

「何言ってるんだお前？まあいいや、じゃあ俺は先に行ってるからあとでな」

雄二も教室から出て行ったところで早速、手紙を読んでもみることにする。

しかし、手紙を開けてみると思った以上の長い文章は書いていなかった。

『これを見たものへ』

この手紙を見たものがいた場合そのときはまだ間に合う。

この手紙を見たものがいた場合手遅れになる前にはやく対処を。

もうタイムリミットは刻々と近づいている。残りは一週間かそこらだと思つ。

奴らは表面は陽気でノリがよく優しいがそんなのは作り物、気を許したら最期。

奴らに直接なる弱点はない。

しかし呼びかければ必ず振り返る、そして何より首元に***がある。

入り口は屋上の倉庫の中にある。

だれか奴らを止めてくれ、そして騙されるな、奴らは』

そこで手紙の書きとりが終わっている。

首元になにがあるんだ？そしてなんだ奴らとは？

明久はとんでもないものを見てしまったような気がした。

「なんだよ奴らって……もしかして偽……はっ！」

目の前にただならぬ気配を感じて見てみるとドアの向こう側に笑顔
を浮かべた瑞希がたっていた。

その笑顔は今日一番の美しい笑顔だったがその時はなにやら得体の
しれない恐怖があった。

「あ！明久君たらココにいたんですか探しましたよ？」

「ひ、姫路さん」

すると瑞希は笑顔のままドアを開けて教室の中に入ってきて明久に
近づいてくる。

「それより明久君は今何を見ていたんですか？」

「っえ？それは、その……テストだよ」

「ウソですよね？」

「え！？」

「それにこの頃みんなの様子がおかしいって言っていましたけれど何がおかしいんですか？」

「いや、その・・・なんか・・・霧島さんが」

「『霧島さんが』 だけですか？他にも何かあるんじゃないですか」

笑顔で首を横に曲げるがそれはほぼ直角に曲がっているといってもよかった。

目の前にいた瑞希は腕を大きく回すと明久の肩をものすごい力でつかむ。

「さあ私に話してみてください。いったい何を見たのか・・・」

「姫路さん・・・僕は」

その時、雄二が奥の扉を開けた。

「やっばい、やっばい。忘れ物しちまった」

雄二の存在を確認すると瑞希は悔しそうに舌打ちをした。

「あつ、姫路と明久じゃねーか。二人で何やってるんだ？」

「いや、なんでもないんですよ。そうだ私先生に頼まれたことを思い出したのでちょっと行きますね。皆さんが来るころには帰れると思いますよ」

手を明久の肩から話した瑞希は笑顔でそう答えた。

「じゃあ、またあとでね明久君」

そう明久に耳打ちをすると瑞希はバツクを持って教室を後にした。

「明久、姫路と何やってたんだ？あまり変なことやってると異端審問会の奴らに惨殺されるぞ」

「そんなんじゃない、そんなんじゃないんだ」

まだ5話の続きですが 明日また

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6130y/>

バカとテストと恐怖のクローン召喚獣

2011年12月10日02時46分発行